

アカショウビン 英:Ruddy Kingfisher 学:Halcyon coromanda

1. 分類と形態

分類: ブッポウソウ目 カワセミ科

全長: 25-27 cm
 自然翼長: ♂ 121.6 mm (116.5-126) ♀ 121.5 mm (114-127)
 尾長: ♂ 74.3mm (70-80.5) ♀ 73.6 mm (68.5-78.5)
 全嘴峰長: ♂ 58.4 mm (56.0-61.2) ♀ 58.9 mm (55.2-63.2)
 ふしよ長: ♂ 17.8 mm (16.1-20.7) ♀ 17.8 mm (15.7-20.1)
 体重: ♂ 103.8 g (80-129) ♀ 111.6 g (94-147)
 腰の白斑(縦+横): ♂ 72.6 mm (60.9-82.7) ♀ 68.3 mm (60.2-79.5)
 ※全長は Brazil (2009), それ以外は沖縄県宮古島での繁殖期のデータ(平均値(最小-最大値)). ♂n= 45, ♀n=37

羽色:

国内に生息する2亜種のうち、亜種アカショウビンの上面は赤褐色で、腰の白斑は小さく水色がかかる。亜種リュウキュウアカショウビンは上面の紫色光沢が強く、腰の白斑が大きい(写真1)。初列風切の長さ順を不等号で表した翼式は亜種アカショウビンでP8>P9>P7>P6、亜種リュウキュウアカショウビンでP8>P7>P9>P6が多い(小林ほか 2012)。

宮古島で捕獲した個体は血液による性判定を行い、雌雄の形態を比較した。腰の白斑はオスで大きく、メスで小さい傾向があった。メスの白斑には水色の羽が多く混ざる。喉や腹の色はオスよりもメスで明るい傾向にあるが、雌雄で比較できる観察環境でなければ識別は難しい。幼鳥は全体的に褐色で体羽に黒い羽縁がある。嘴と尾羽は短い(写真2)。

鳴き声:

繁殖期間中を通して「キョロロロ」とさえずる。さえずり頻度は早朝にピークがあるがその後も断続的にさえずる。雌雄で「コーキョロ」と鳴き交わり、ごく小さい声で「クー」と鳴くこともある。警戒声は「ケケケケッ」。飛翔時に「ケキョッケキョッ」と鳴くことがある。



写真1. 腰の白斑 上から順に、亜種アカショウビン性不明成鳥(宮古島で春の渡り期に捕獲)、亜種リュウキュウアカショウビンオス成鳥、同メス成鳥

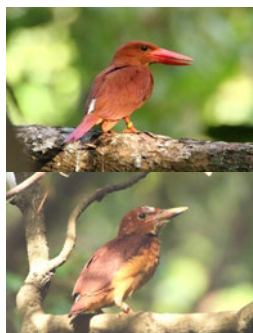


写真2. 亜種リュウキュウアカショウビン 上:オス成鳥、下:オス幼鳥

2. 分布と生息環境

分布:

日本には夏鳥として飛来する。北海道から屋久島で繁殖する亜種アカショウビン *H.c.major* と、トカラ列島以南の南西諸島で繁殖する亜種リュウキュウアカショウビン *H.c.bangsi* が生息する。全国鳥類繁殖分布調査によると、北海道では道東にはもともとほとんど分布していなかったが、道内のその他の地域では1980年代以降に個体数と分布域が激減してから現在まで回復していない。一方、本州では近年になって分布が回復しており、特に日本海側で増加の傾向が著しい。南西諸島では特に増減がない。

3. 生活史

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
越冬期	渡り	繁殖期	渡り	越冬期							

繁殖システム:

一夫一妻で繁殖する。ヘルパーはいない。基本的には年1回繁殖である。つがい相手は毎年変えることが多いが、同じつがい複数年続くこともある。雌雄ともに、前年と同じ繁殖地に帰還し、特にオスは前年と同じ縄張り内で繁殖することが多い。

巣の位置、形と材質:

巣穴は主に立ち枯れの枯木や生木の枯れ枝、土の崖に掘る(写真3)。造巣は雌雄とも行う。朽木や枯れ枝はもろいため、同じ巣穴を複数年使えることは少ない。亜種アカショウビンでは、オオスズメバチの巣(美島ほか 1988)、土堀、かやぶき屋根(中村・柏木 1989)への営巣も確認されている。キツツキ類が生息するところでは、それらの古巣を利用することもある。亜種リュウキュウアカショウビンでは、タカサゴシロアリの巣への営巣が確認されている(Fly & Harris 1992)。宮古島の調査では、立ち枯れのリュウキュウマツ(n=33)、タブノキ(n=15)への営巣が多く、オオタニワタリの根への営巣(n=5)もあった。



写真3. アカショウビンの巣と卵

一腹卵数、卵サイズ、卵色:

一腹卵数は平均4.3個(3-5, n=46)である。白色でピンポン玉のような球形の卵である。大きさは、平均長径32 mm×短径28.9 mm(清棲 1978)。

抱卵、育雛期間、巣立ち率:

飛来してすぐに造巣を始めるが、産卵開始は遅く、宮古島では5月下旬頃から産卵が始まる。抱卵日数は約21日、育雛日数は約17日である。日中は雌雄で分担して抱卵するが、夜間はメスが抱卵する。孵化後数日はメスが巣内で抱雛するためオスが給餌を行うが、それ以降は雌雄ともに給餌を行う。ヒナは巣立ち直前まで羽鞘に覆われている(写真4)。巣立ち後もしばらくは両親が給餌する。



写真4. 孵化後12日齢の巣内ヒナ

巣立ちに成功した巣の割合(1羽でも巣立った巣は成功とする)は51.4%(n=70)であった。失敗要因は、イタチやクマネズミ、カラスによる捕食が多いと考えられる。

その他、林道沿いの巣でカメラマンの居座りによる給餌阻害が原因と思われる巣内ヒナの餓死があった。巣に近づかず、水浴び場で撮影するなど配慮ある観察が望まれる。

渡り:

春は3月下旬から4月初めに南西諸島に飛来し始め、5月には本州の繁殖地にも到着する。南西諸島ではごくまれに、越冬する個体が観察されることもある。本州で繁殖するアカショウビンは、少なくとも春の渡りでは南西諸島を通過していると考えられる。2015年に、宮古島で繁殖するア

カショウビンにGPSデータロガーを装着して渡りを調べた (Uemura *et al.* 2019). 2個体から秋の渡りと越冬のデータが得られ、宮古島のアカショウビンは9月末から10月初めの間に繁殖地を離れてフィリピンに渡ることが分かった。また、渡りの途中には高度約4000 mの高さで渡っていた記録が得られた。フィリピンの研究者に聞いたところ、越冬地ではアカショウビンは稀で、少なくとも繁殖期のリュウキュウアカショウビンのような密度では生息していないようだ。

4. 食性と採食行動

水辺の近くで魚やサワガニなどの水生生物を捕食することが多いが、昆虫や両生爬虫類も幅広く捕食する。魚やカニ、カタツムリなど骨や殻のあるものは枝に打ち付けて砕いて食べる。

亜種リュウキュウアカショウビンは、宮古島では林床のカタツムリなどを捕食する様子が多く確認された。雛への給餌物はサキシマキノボリトカゲやヤモリ類などの両生爬虫類の割合が高く、次いでカマキリ、クマゼミ、マダラコオロギなど昆虫類も多く給餌した。ミヤコカナヘビやネズミ類、サンコウチョウのヒナなどの給餌もあった(写真5)。

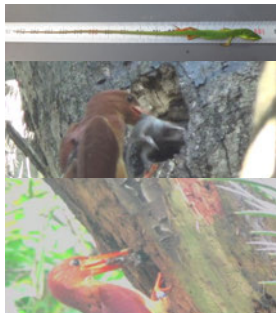


写真5. アカショウビンの給餌内容 (上:ミヤコカナヘビ, 中央:ネズミ類, 下:小鳥類の雛)

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 島ごとの音響環境に適応した声をもつ

南西諸島のアカショウビンは島によって声の高さが異なる。執筆者らによる研究では、セミがうるさい島では声が低く、比較的セミがうるさくない島では声が高いことがわかった(図1)。南西諸島では島によって生息するセミの種類や出現時期が異なり、セミに由来する環境音の大きさも島によって異なる。宮古島では、アカショウビンの繁殖期の早い時期からミヤコイニイやクマゼミが大きな音で鳴き始める。セミの音はアカショウビンのさえぎり周波数よりもわずかに高く、音量も非常に大きい。宮古島のアカショウビンはさえぎり周波数を低くずらすことで、さえぎりがセミの音に埋もれてしまわないようにしていると考えられる。伊平屋島や奄美大島ではセミの発生が遅く、セミの音の影響が少ない。生息地による生物相の違いが鳥のさえぎりを進化的なスケールで変化させる例として研究を続けている。

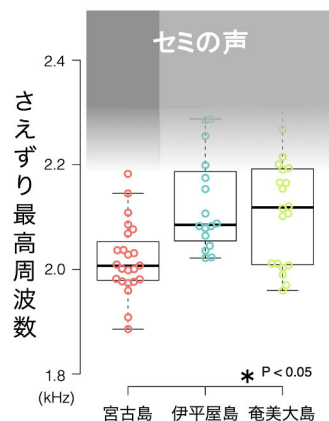


図1. 島ごとに異なるアカショウビンのさえぎり周波数。セミの音は濃い色ほど大きいことを表す

詳しくは <https://db3.bird-research.jp/news/202004-no1/>

● コルク製巣箱への誘致

アカショウビンのように自ら巣穴を掘って造巣する一次樹洞営巣性の種は、他の鳥が掘った古巣や樹洞や巣箱を利用して営巣する二次樹洞営巣性の種と比べて巣内を観察して営巣中の基礎的なデータを得ることが難しい。しかし、アカショウビンがさまざまな基質に営巣する性質を生かして、コルク製の巣箱に繁殖を誘致することができる。宮古島ではコルク製巣箱への誘致を行い、繁殖が確認された(写真6)。コルク製巣箱は巣内のモニタリングに適しているだけでなく、これまでに捕食による失敗が確認されおらず繁殖の成功率が非常に高い。巣箱の耐用年数も朽木などと比べると長く、同一巣箱で複数年連続で繁殖した例もある。コルク製巣箱は、個体数が少なく絶滅が危惧される低緯度地域のカワセミ科の鳥類やその他の一次樹洞営巣性鳥類の保全、繁殖環境創出にも役立てることができると考えられる。



写真6. コルク製巣箱で繁殖するアカショウビン

6. 引用・参考文献

Brazil, M. 2009. Birds of East Asia. Princeton University Press, Princeton.
 Fly, CH., Harris, A. 1992. Kingfishers, Bee-eaters and Rollers. Christopher Helm. London.
 清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑 I 増補改訂版. 講談社.
 小林さやか, 中森純也, 亀谷辰朗. 2012. 鳥取県鳥取市で確認された亜種リュウキュウアカショウビン *Halcyon coromanda bangsi* の記録. 日本鳥学会誌 61(2): 314-319.
 美島秀夫, 中村正博, 中坂学夫. 1988. アカショウビンがスズメバチの古巣で繁殖. Strix 7: 283-284.
 中村浩志, 柏木健一. 1989. アカショウビンの繁殖生態と雛への給餌餌内容. 信大志賀自然教育施設研究集積 26: 15-24.
 Uemura, S., Hamachi, A., Nakachi, K. & Takagi, M. 2019. First tracking of post-breeding migration of the Ruddy Kingfisher *Halcyon coromanda* by GPS data logger. Ornithological Science 18: 215-219.

執筆者

植村慎吾 バードリサーチ・浜地歩(株)ブレック研究所

大阪市立大学の大学院生だった2015年から、主に沖縄県の宮古島でアカショウビンの調査研究を行っている。2019年秋には、アカショウビンを追いかけてフィリピンの越冬地でも調査をした。宮古島での調査中の息抜きは、島の子どもたちと遊ぶこと、漁港でアイスを食べながらアジサシ観察をすること、例数の少ない渡り鳥を探すこと、サンゴ礁の海を泳いで熱帯魚と戯れることなどたくさん！調査地の皆様、大変お世話になりました。



フィリピン越冬地調査でガイドさんと(右から浜地, 植村, ガイドさん2人)